

Art & Design NEWS

マンガコース/アニメコース

講評 神澤 孝宣

キャラクター構築

／マンガコース

3年 西川 暢勇 「Baby Blue」
この授業では就職を見据え、制作した作品を第三者に「見せられるかたち」にすることに重点を置いている。

普段学生が思い描くキャラクターデザインは、自分の作品づくりのための覚え書きのようなもの。自分の思い描くキャラクターを第三者に理解してもらえらるフォーマットに落とし込むことまでが、キャラクターデザインの分野になる。独り善がりにならないためにもこの過程は重要だ。この作品は見せるための創意工夫、見せられるレベルのフィニッシュワークの質の高さを評価した。



3年 西川暢勇

CGアニメーション

／アニメーションコース

1年 安田 愛海 「飛燕」

1年生の前期15週でアニメーションを1本制作することはデジタル機器が進化したとはいえものすごく大変なことだ。夏休みの多くを課題制作に当てて、より完成度の高い作品を目指した学生が多かった。そんな中でも安田さんの作品は、作者のアニメーション表現における探求心や好奇心を感じられる熱量にあふれた作品だった。動画の技術や画力はまだこれからだが、作品制作に対する意志の高さ、情熱を評価したい。その上で、自分はどのような作品を作りたいのか、そのためにはどのような技術が必要なのか、一つずつステップアップして欲しい。



1年 安田愛海

講評 葛佐 博



2年 北野博司

2年 北野 博司 「いちろう」

キャラクターもののストーリーギャグマンガ。絵の表現力はまだまだだが、会話が面白くテンポもある。キャラクター設定もそれぞれの役目がしっかりと確立されていて差別化がされている。自分はペットの犬だと言い張る調子がよく無責任な宇宙人いちろう、いちろうを拾ってペットにした主人公の妹、その妹を誘拐して交換条件にいちろうを捕獲しようとする宇宙警察、そのなかで唯一まともな主人公…と一見複雑な構成をあっさりまとめてクライマックスにもって行っているその演出力を賞う。画力、表現力のグレードアップを求む。

1年 石原 愛理 「無弦69」

画力、表現力も秀逸だが一枚の絵に対する集中力、情熱を買う。これでストーリー構成、魅力あるキャラクター作りができれば無敵である。まあそれがマンガでは一番の問題だが…一回生なのでこれから努力次第、可能性は大いにあると思う。絵的には限られた時間内でたくさんのページ数をこのグレードで仕上げられる持続力があるかどうか。まだマンガ作品を仕上げるという経験が少なからしいのでどんどん作品制作に挑戦してほしい。

1年 石原愛理



ゲーム



金賞 3年 北川淳一・川口清史



金賞 1年 岡田彩佳

講評 山口 尚

金賞 3年 北川 淳一、川口 清史 「3DゲームUNKO」

数少ないフル3Dのアクションゲームで、完成度の高い作品である。オープニングシーンでは、実際のマップをカメラ移動で紹介し、キャラクターがオブジェクトの前に立つと、「Cキーですくう」というメッセージを自動表示、スペースキーで簡単に操作画面表示を行うなど、初めて遊ぶプレイヤーにやさしい気配りが多数盛り込まれている。プレイヤーキャラクターの影をリアルタイムに描画するなど、細かいところにまで難し技術が使われている。大ジャンプは、かなりの高さまで飛ぶことができ、気持ちよく落下速度のバランスも良い。マップの端の処理や坂道など、グラフィック的な詰めが甘さが目立つのが残念。今回は、ゲームのキャラクターや世界観の作りこみにもトライしてほしい。

講評 長久保 光弘

金賞 1年 岡田 彩佳 「EXIT」

ピクトグラムをゲームの材料にし障害物を記号化、ユニークな視点で、見た目にも美しい。ゲーム中、記号と遊びの関連が更に強くなると特徴が活きる。今後の調整でいっその進展を期待する。日頃、学生同士が制作を助け合い、放課後まで熱心に取り組む姿が見られる。互いの力が融合し相乗効果を得、そして、相手を思いやる様子に温かさを感じる。

舞台芸術

講評 上海 太郎

3年 課題公演

シェークスピア作「テンペスト」

妖精工アリエルを4人のチームで演じ、プロスペロの魔術の世界を表現するシーンがおもしろかった。最初は自信なさげだった役者達も日を迫るうちに成長した。冒頭の嵐のシーン、ミランダとファエディナントのラブラブなシーンがもっとふくらめばよかったのだが…残念。

「テンペスト」舞台写真



「ひょっこりひょうたん島」のスタジオセット模型



同 スタジオセット平面図

金賞 3年 竹腰 千晶 「ひょっこりひょうたん島」のセットデザイン

かつてNHKテレビで放映された人形劇「ひょっこりひょうたん島」から1話を選び、そのセットデザインを考えてもらった。ギニョールという下使いの人形劇のセットで、床から4尺高で考える構成は、少し難易度が高かったように思う。この作品は「サロン」「ダンディの家」「子供の家」の三つのセットをそれぞれ借景として使えるように構成しており、限られたスペースで効率の良い空間を生み出している。ケコミ、カベ、樹木、遠景すべてに英字新聞紙を表面素材に使い、シンボリックな雰囲気をつくり出している。



「夕鶴」舞台模型



同 「夕鶴」舞台平面図

銀賞 2年 平元 佳奈 「夕鶴」の舞台デザイン

民話劇「夕鶴」に正面から取り組んだ作品。屋外にあたる前舞台は平場、屋内は一段高くして奥舞台に設定した。横の動きよりも夕タデの動きを重視した構成で、客席からの遠近感が役者の動きでさらに強調され、素朴な空間の存在感が印象づけられる舞台である。



「スクルージ」舞台模型

金賞 1年 森川 彩夏

「スクルージ」の舞台模型制作

1995年に青山劇場で上映された「スクルージ」という舞台。装置デザインは妹尾河童。この舞台写真からセット模型を起こしてもらった。図面から起こすのではなく、写真から起こすため、寸法感覚が要求される。この作品は全体のバランスが良く、寸法の把握、読みと優れた模型である。

秋の造形展優秀作品特集号

平成20年秋の造形展の優秀作品特集号です。各コースとも金賞または同等のすぐれた作品に先生の講評や本人のコメントをつけてあります。

美術史・美術理論

講評 関 隆志



金賞 4年 池尻篤志
葛飾北斎筆「流水に鴨」
(原寸部分模写)



金賞 2年 岡本麻路
「普賢菩薩像」(復原模写)



金賞 2年 佐藤綾香
ヤン・ファン・エイク作
「受胎告知」(模写)

洋画

今年の秋の造形展では油絵画の作品の絵具の処理が、各学年必修熟度を高めていることが目立っていた。美術学各コースのほぼ同じ内容のものが兵庫県立美術館原田の森ギャラリーで開催されたREAL展で引き続き展示された。

講評 中村 貞夫



銀賞 1年 高橋武尊

美術史・美術理論

美術史・美術理論コースにとって6年目を迎えた今年の秋の造形展は、爽やかな秋にふさわしい収穫があった。

大学で学ぶ目的は、社会に飛び立つ直前で最後の時間を、生涯の友ともなりうる学友たちと、切磋琢磨する時空を共有することにある、と、常々話している。加えて、もう一つ大切なことは、自分が好み、望む勉強の主題を大学に求めて入学したのであるから、決して安易に他者に迎合すること無く、また、自分自身に満足することなく、常に貪欲に、より良い作品の制作に努めること、である。今回の金賞・銀賞及び佳作受賞者は、こうした大学で学ぶ目的を見事に体現しているように見受けられる。

流水に泳ぐ、或いは、顔を求めてもくろむ鴨の姿を表現した「葛飾北斎筆「流水に鴨」(原寸部分模写)」を正確な筆使いで再現して、金賞を得た池尻篤志(4年)さんは、これまで、クリムトの模写で受賞した経験があり、現在も日本画制作と同時進行で、長時間かけて、ファン・アイク作「アルノルフィーニ夫妻像」の精密模写を制作し続けている。同じく金賞受賞の岡本麻路(2年)さんは、「普賢菩薩像(復原模写)」で、正面から仏画に取り組んだが、もともと岡本さんは、先の池尻さんと同じく、洋画の精密な模写で非凡な才能を示している。こうした、和・洋のいずれかの模写技法に傾くことなく、油絵具・岩絵具と、両方の絵画技法を平行して学ぶ機会が与えられているのが、本コースのユニークさを示している。その意味で、2年生の佐藤綾香さんの「ヤン・ファン・エイク作「受胎告知」(模写)」は、精密模写とはいかないものの、明示する作品である。そして、今回、2年生から例外として、油絵画と日本画の2人の金賞受賞者がいたのは、喜ばしい限りである。

その他、石橋奈紗(2年)さんは、「式部卿作「鷗鷺図」(模写)」2作で銀賞を受賞したが、今後、式部卿の残りの10作品も続けて模写する予定とのことであり、その頑張りにも惜しみないエールを送るものである。

今回の最後の、しかし、決して小さくない収穫は、1年生の頑張りが見られたことである。岡田沙織(1年)さんの「ポッティチェリ作「プリマヴェーラ」(原寸部分模写)」と、松原茉莉(1年)さんの「ミネルヴァのレリーフ(模刻)」は、2人の今後の活躍を予期させる力作であり、その成長は、美術史・美術理論コースにとって、大いに期待される。



銀賞 1年 岡田沙織
ポッティチェリ作
「プリマヴェーラ」(部分模写)



銀賞 1年 松原茉莉
「ミネルヴァのレリーフ」(模刻)

講評 中村 貞夫

金賞 2年 戎野 綾子 「彩」

美しい色彩と、のびやかで大胆な構成はファンデルワッサーを思わせるものがある。この無心、無垢をいつまでも保ち続けてほしい。

講評 西田 周司

金賞 3年 大澤 悠二 「由れる灰5」

具体的な空間のなかに抽象的な形態、引っ掻いたような線あるいは色彩がある。具体的な絵画を追求していった方向から何か形にならないもの、気分的なものを、形に留めようとしているように見える。取り留めのない孤独な作業は透明感のある色彩と重なって诗情を漂わせてしっかりとした表現になっている。

講評 加藤 勝久

金賞 4年 眞鍋 紗季 「自画像」

いくつものテーマを一つの画面に組み入れて、絵を難しくしてしまう事は良くある事です。この作品の場合、テーマを一匹の金魚に絞込み、明暗の配置や色彩の重層的効果を活かして、透で深みのある印象深い作品に仕上げられています。「自画像」というタイトルに意外性を覚える人もあると思いますが、自己と絵画制作の関係性を考えた時に、作者には自然とこのタイトルが浮かんだのです。



金賞 2年 戎野綾子



金賞 3年 大澤悠二



金賞 4年 眞鍋紗季

日本画



金賞 3年 今郷阿佐美

銀賞 3年 中川真一

銀賞 2年 松井優美

講評 曲 子明良

金賞 3年 今郷 阿佐美 「集う」

正方形の画面に猫が六匹。上から俯瞰した図で、寝ているのやら跳んでいるのやらが動きのある構図になっている。銀箔を効果的に使った落ち着いた渋い色調が美しい。

銀賞 3年 中川 真一 「朝の街」

裏通りの朝、昨夜の酔客達の喧騒も消え、どこか気怠さの残る空気がうまく表現されている。ただ仕事が淡いのもう少し描き込んでくるともっと良くなるだろう。

銀賞 3年 近松 茉耶 「根」

樹の根を描いている。独特の不思議な表現で不安定な構図が緊張感を醸し出す。色感がとても良く色使いの妙味が持ち味の絵である。

銀賞 2年 松井 優美 「夏の終わり」

山崩来の枯れた赤い実と貝殻の不思議な組み合わせの絵である。水の流れるのか風なのか解らない白い線。爽やかな色彩で動きのある画面になった。

その他の作品では

阪田智世、カラフルなペンギンを描いた「雨の日」
城戸啓吾、散髪的情景を白黒で表現した「散髪の日」
牧野悠、壊れて捨てられたおもちゃに郷愁を誘う「ガチャガチャ」
志垣玲奈「日曜日の午後」、門田稚子「真珠と瑪瑙の構成」、宮森優季「そらに…」
等個性的な絵が目についた。

1年生の課題作品では、全員が静物画や素描に懸命に取り組んでおり、これからは楽しみである。

彫刻



金賞 4年 西村大喜



金賞 3年 坪田和紗



金賞 2年 稲田裕明



銀賞 1年 入江慎吾

講評 市川悦也

時間を先取りする、或いは時間と共存しての表現が可能なメディアコンテンツの諸コースと異なり、専らに時間を浪費する事でしか表現出来ない上に、過酷とも言える労働を伴うのが彫刻を制作するという行為なのです。だからこそおもしろい！人類が見出した究極の芸術だとする若者達がここに居ます。金賞、銀賞、佳作受賞の各作品は完成度において同等であり、制作プロセスを知らない第三者が採点すれば異なる評価が出たかも知れないと思える秀作が揃いました。

金賞 4年 西村 大喜 【nagare】

作者自身はあずかり知らぬ事象であるが、蛇口を大理石で制作してなければ、遅か50年前にウインドディスプレイとして巷に流通していた「仕掛け物」のひとつなのです。蛇口を創作したことで、かろうじて現代アートに甦った作品だと云う事も知っておいてください。とは言え、造形展で注目を集めたオブジェの一番人気作品でしたから、自信を持って今後も様々な表現に挑戦を続けてください。

金賞 3年 坪田 和紗 【つぼみ かずさ】

制作に楽な道は見付かないものだ。集成材課題ではこれまで誰も挑戦しなかった具象表現を試みて、そして成功できた。途中作業の進捗が思わしくなく何度も逃げ出そうとしたが、良く完成出来たね！次作にも期待しているよ。

金賞 2年 稲田 裕明 【壁】

塑像の段階ではそれほどでもなかった頭像だが、石膏直付けの過程を経ることで秀作に進化した。透明感を有する上出来の小品であり、彫刻としての展開の可能性を感じさせる作品である。

銀賞 1年 入江 慎吾 【つぼみ】

初めて挑戦した石彫作品。先ずは完成を祝いたい。4月新入生の時点では、箸より重い物を持ったことの無さそうなこの少年に、果たして石を掘り崩すことが出来るのだろうかと自他共に不安な思いが過ぎったに違いないが、これほどまでに完成度高く制作を貫徹できたのは、年齢の異なる良きライバルに恵まれた結果だと思う。目の前に乗り越えなければならぬライバルが存在する事の幸せを噛み締めるがよい、切磋琢磨することだけが為しえない作家への登壇期が遥か先ではあるが見え始めた第一作となった。

ファッションデザイン



銀賞 4年 池田なつき

金賞 3年 金村実奈

金賞 2年 藤井絵理

銀賞 1年 茶山友理

4作品とも本人のコメント

銀賞 4年 池田 なつき 【Ciel】 コート

ウールの素材感を活かした、シンプルでクラシックな印象のコートです。全体にグレーで統一し、裏地にカラフルな花柄をつかうことで華やかさを加えました。初挑戦のファーとシルク素材に苦戦しました。

金賞 3年 金村 実奈 【蓮の花のように】 プライダルウェア

蓮池に咲く大輪の花から、発想したデザインです。淡い黄色の花びらをドレス全体にちりばめ、女性が凛として美しく輝いて見えるようにという思いを込めました。

金賞 2年 藤井 絵理 【フラワー】 ワンピースドレス

大柄のチェックを活かし、一枚一枚ステッチしたコサージュや、切り替えをいれたストラップで、手芸的なトリミングにこだわったデザインに仕上げました。

銀賞 1年 茶山 友理 【Memory】 スカート&コーディネート

フェミニンなデザインですが、黒を使うことで女性の強さと優しさを表現しました。プリーツを美しくみせるための位置と分量を考えました。

イラストレーション



金賞 2年 尾村咲



銀賞 2年 福来拓也

講評 大河 繁

金賞 2年 尾村 咲

この作品は、英国・エリザベス朝からヴィクトリア朝時代にかけて、貴婦人が秘めた思いを花に託し、恋など楽しむことで発展したことが起源と言われている「花言葉」をテーマに作品を描いていただきました。

作者（尾村咲）は雨の降っている庭に静かに咲く椿。花言葉は「理想の愛」私は大切な存在を思う時、自分より先にいなくなったりしてしまう事を考えて、恐くなったりしてしまうことがよくあります。

「大切な存在とずっと共に居たい」という理想を思い描いたそうです。

ツバキがとても印象深く、白く抜かれたシルエツトは、入り口なのか出口なのか境目なのか、とても意味深い作品に仕上がったように思います。

今まで描いてきた尾村咲さんの作品とは表現の仕方も大きく変わってきた印象があり、内に秘めた情熱が作品として花開くよう今後にとても期待しています。

銀賞 2年 福来 拓也

この作品は、童話「赤ずきん」をテーマに一枚の絵で表現した作品です。

おばあさんの衣装を赤ずきんの衣装に変えた狼の表現は、とても良いアイデアだと思います。ペン画タッチも福来拓也には合っているようです。入学時に描いていたアニメ少女の表現からは想像できないほど画風が変わりました。

まだまだ提出作品には良い時と悪いときの差がありますので、常に自身の最高レベルを目指してさらなる飛躍を期待しています。

環境トータルデザイン/建築・ショップデザイン



金賞 3年 灰掛ひいろ



金賞 2年 加藤あかり



金賞 1年 越智菜々



銀賞 1年 奥田隼也



銀賞 1年 近田明日香

講評 李 映一

1年生の作品は、空間に対する理解から作り方に至るまでの過程を勉強することが目的である「スペースモデル演習」の授業で出された複数の課題である。金賞（越智菜々）の作品は、非常に洗練された空間作りが特徴で繊細さが伝わる。そして、銀賞（近田明日香）の作品は、壁一枚一枚が非常に迫力があり、無駄がないところが特徴でもある。もう一つの銀賞（奥田隼也）は、蛙が飛び跳ねる形状を空間に置き換える課題のものである。今でも飛びそうな動きがシンプルかつダイナミックに、よく表現されている。

2年生の金賞（加藤あかり）の作品は、風車に見立てたデザインで、生活スタイルの多様性を豊かに表現した集合住宅の計画である。また、3年生の金賞（灰掛ひいろ）の作品は、道頓堀川沿いの地区に対して、エコビレッジでの活性化を提案した意欲的な環境デザイン構想である。

プロダクトデザイン



3年 上田朗

2年 有吉将平

1年 中村亮太

講評 中村 隆一

3年 上田 朗 「車のデザイン写真」

車のデザインはエコロジカルな地球環境の形成というテーマにも触れてくる。即ち、幾種類もの燃料で走る車をイメージし、排ガス問題を念頭に置いて未来をどう捉えるかという事を、デザイン表現しなければならない。上田君の作品はヴァーチャルなイメージを表現しようとして試みている。

2年 有吉 将平 「家具のデザイン作品」

実際に生活空間の中で使用する、家具のデザインスケッチを考えながら、家具工場に掛けて生産方法を見直し、製造の可能性・材料の選択、ディテールデザインを教員と検討し、デザイン決定した後1/10モデル、原寸図を作成する。職人さんとの対話も大変重要な実習である。

1年 中村 亮太 「虫をテーマとしたフィギュア作品」

幾種類もの虫を写生して、その結果のもとに有機的なキャラクターデザインを立体として表現する。

単なる写実ではなく、ヴァーチャルイメージとした表現を期待するのであるが、残念ながら殆どの学生が写実の次元に止まる表現となる。

中村君の作品は写実を乗り越えた超写実のフォルムとなっている。

写真

講評 北田 研索



金賞 3年 小林志穂

金賞 3年 小林 志穂 「対」(連作20点)

入学以来動物園で飼育されている動物をテーマに写真を撮り続けている作者は、都会の中にある動物園には、檻の中に木がない世界が存在するという矛盾に気づき、今回は、水やガラスの反射を利用して、一つの画面に二つの世界を構成、「オリのあちら側とこちら側」を写し取りました。

ユニークな発想とともに、フィルムで撮影、プリントされた作品の仕上がりが秀逸です。

銀賞 2年 蓬菜 かおり

「真骨頂」(連作32点)

真骨頂とは、そのもの本来の姿の意味。高校時代の部活の後輩や、町で出会った知らない高校生たちを対象に、6×6判の大型カメラでじっくり腰をすえて撮った32人、32点の力作です。

青春真っ只中、強さの中にも弱さ、戸惑いがあり、考えや生き方の違う高校生たちの本当の姿を表現したかった作者の気持ちがいまに込められています。



銀賞 2年 蓬菜かおり



佳作 1年 石井 杏季 「過去・現在・未来」(連作6点18枚)

CDジャケットに、片目を押さえて遠くを見ている横顔の写真があった。

気になって調べてみると、人間誰にも時間のサイクルがあり、目には物を見るだけではなく、時の流れを見る力があるらしい。

左目は未来を見る目、右目は過去を見る目、そして正面を見る両眼は現在の自分の存在を見つめているのだそうだ。

年代の違う身近な人たち6人をモデルに、その世界の表現にチャレンジした作品ですが、現像・プリント技術が向上すると、もっと素晴らしい写真になります。

芸術情報

講評 林 勇気

金賞 3年 後藤 珠美、佐藤 智美、一宮 寛世、三島 亜貴、栗村 多佳子 「色の本屋さん」



3年 後藤珠美、佐藤智美、一宮寛世、三島亜貴、栗村多佳子

webで配信する映像をビデオカメラとパソコンでグループ制作をしてもらった。他のグループもとても優れた作品があり接戦の受賞であった。「色の本屋さん」をテーマに個々が決められた色にまつわる色とりどりの映像を制作した。ビデオ映像とアニメーションを組み合わせた作品や、丁寧に撮影され編集された映像等、バリエーションに富んでおりそれぞれに見応えがあった。ただ映像の本数が少なかったのは残念だったが、この制作から学んだことと反省点をこれからの制作に生かしてほしいと考えている。

講評 岡本 正昭

金賞 2年 福田 千恵、森下 実希 「アジアの恋」 コンピュータメディアアートコース

親交あるミュージシャンから提供を受けた曲に対してプロモーション風に制作されたアニメーション作品です。用意周到に練られて起承転結がしっかり考えられた画面展開ですが、乾いた感覚



2年 福田千恵、森下実希

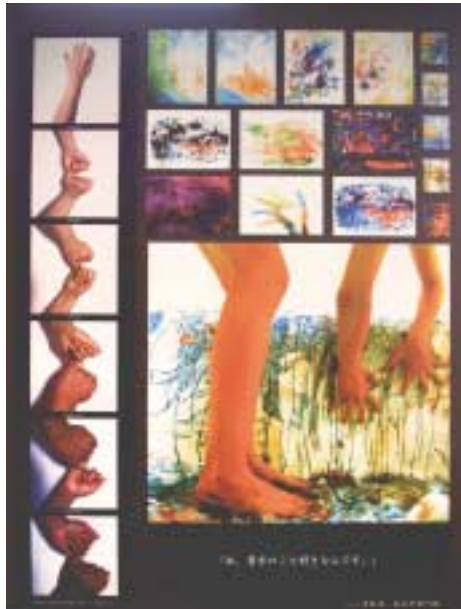
の曲想にマッチしていきつぎりと爽やかな映像作品になっています。タイトル画面から始まるつばきの花のバリエーションをモチーフにした異色の作品構成に対して、発想のオリジナリティが高く評価されました。デジタル作品ですがアナログ的な柔らかさを感じられる優しい映像表現が作品を味わい深くしています。今後の課題として、鑑賞者がつばきの花に抱いている花言葉や落花様式など既成のイメージと作者自身の内面イメージとの接点など映像周辺も含めて気配りされたトータルな作品構成力を期待します。

講評 田中 常久

金賞 1年 栗山 育美 『18歳』 ウェブ・ホームページデザインコース

入学来、半年で習得したコンピュータの表現技術を利用して、「今の自分をビジュアライズ」した作品となっています。習得したコンピュータ技術、応用をまじめに制作表現しようとした姿勢が評価を得ました。表現技術、内容については厳しい意見がりましたが、初めてPCでの制作作業、および制作発表を演習の成果として地道に着実に仕上げたことが評価されました。また、制作意欲、取り組み方などが他の学生への良い規範となる多くの意見で受賞することとなりました。

今後とも着実に成果をあげていける事を望みます。



1年 栗山育美